

ウクライナの国民形成とサッカー

服部倫卓

はじめに

ウクライナでは、ヤヌコーヴィチ大統領／地域党による政権が、欧州連合（EU）との連合協定の締結を目指してきたものの、二〇一三年一月にいったんそれを棚上げし、ロシアからの支援を仰いで目先の経済難を凌ぐ路線に傾いた。かねてから多くの国民が、私利私欲を貪るヤヌコーヴィチ大統領とその一派への不満を募らせていたところ、EUとの協定棚上げが「最後の一押し」になった。反発した市民が同年暮れから首都キエフの中心部で抗議行

動を続け、デモ隊のなかで極右的な武闘派が台頭したことなどもあって、治安部隊との衝突が次第にエスカレートしていく。ついに二〇一四年二月二日にはヤヌコーヴィチ大統領が首都から逃亡し、ここにヤヌコーヴィチ／地域党体制は瓦解した。この政変は「ユーロマイタン革命」と呼び称されている。

しかし、キエフ中心のあまりにラディカルな変動は、ロシア系住民の多いクリミア半島の社会の動揺を招き、三月にはロシアがそれに付け込んでクリミアを編入するという驚天動地の事態となった。四月になると、やはりロシアが挺入れする形で、東ウクライナのドンバス地方（ドネツィク州およびルハンシク州）でも分離主義運動が高まり、そ

の後泥沼の内戦へと突入していく。五月二五日投票の大統領選挙の結果、ポロシェンコが新大統領に就任したものの、荒れ模様の船出となった。^{*1}

さて、一般のウクライナ危機は、日本を含む外国のメディアでも大きく取り上げられたが、その際に判で押したように繰り返されたのが、「ウクライナの東西分裂」「親欧米の西部、親ロシアの東部」という図式である。そうした図式に事実の一端が含まれていることは、否定するまい。

しかし、単純な東西二元論ばかりが横行して、そこに潜んでいるさまざまなニュアンスが顧みられていないのは、大きな問題だと考える。

突飛に思われるかもしれないが、私見によれば、今回取り上げるサッカーこそ、そうしたステレオタイプに反省を迫る格好の題材である。以下本稿では、サッカーというリズムを通じて、ウクライナの政治変動と国民形成につき考察してみたい。^{*2}

I 地域派閥同士が争う エスタブリッシュメント

ウクライナ・サッカーのエスタブリッシュメントの勢力

図を眺めてみると、いわゆる「東西分裂」という図式には必ずしも合致しないものの、首都キエフ（地理的には中部と位置づけられる）の派閥と、東部のドネツィクの派閥とによる主導権争いがあり、それが政治状況と連動して動いてきたということがいえる。

L・クチマ大統領の時代から当国のサッカー界を牛耳っていたのは、フリホリーとイーホルのスルクス兄弟であった。兄弟は首都の名門クラブ「ディナモ・キエフ」を保有し、兄のフリホリーは一時ウクライナ・サッカー協会会長とウクライナ・プレミアリーグ（同国の最高峰のリーグ）会長を兼任していた。

しかし、R・アフメトフ氏がドネツィク州の鉄鋼業を基盤に巨万の富を築き、地元のサッカー・クラブ「シャフタル・ドネツィク」の強化に乗り出すと、サッカー界の力関係が変わってくる。二〇〇〇年にアフメトフはフリホリー・スルクスをプレミアリーグ会長の座から引きずり下ろし、自派のR・サファイウリンを同ポストに据えることに成功する。二〇〇二年にドネツィク州出身のヤヌコーヴィチが初めて首相に就任するに当たっては、アフメトフがシャフタルのサポーター軍団をキエフに送り込んで、ドネツィク閥の力を誇示したこともあった。

さらに時は流れ、二〇一二年六月七月にはウクライナ・ポーランド共催でサッカーのヨーロッパ選手権（UEFA ユーロ二〇一二）が開催された（UEFAは欧州サッカー連盟の略）。この大会を無事に終えると、フリホリー・スルキスはウクライナ・サッカー協会会長からも退任し、後任にはドネツィク派であるA・コニコフが就いた。なお、

二〇〇八年からブレミアリーグ会長を務めているV・ダニロフは、Yu・ティモシエンコの党派に属す最高会議員ではあるが、キエフ対ドネツィクという対立構図のなかでは中立的な立場と位置づけられる。図1は、上述の幹部人事と、ウクライナ政治およびサッカーの主な動きを整理したものであり、キエフ派の幹部は薄いグレーで、ドネツィク派の幹部は濃いグレーで示している。また、ウクライナのサッカー・クラブの対抗関係は、政財界の勢力図をかなりの程度反映しているので、二〇一三／一四シーズンのブレミアリーグに参加したクラブと、そのオーナー／親会社との対応関係を、表1に示した。

近年のウクライナ・サッカー界で重要なイベントとなったのが、上述のユーロ二〇一二であるが、その折に象徴的な場面があった。この大会で、ウクライナ代表は初戦のスウェーデン戦こそ勝利するものの、その後のフランス

戦、イングランド戦に連敗して、グループステージで敗退してしまった。まずいことに、初戦の会場がキエフであったのに対し、第二、第三戦の会場はドネツィクだった。これに噛みついたのが、ティモシエンコ派のM・トメンコという幹部である。フランス戦後に同氏はフェイスブックに以下のように書き込んだ。

「ウクライナ・フランス戦の結果は、目に見えていた。なぜならば、アウェーで戦ったからである。一度としてウクライナを応援したことのない街に、死活的な二試合を割り当てたことには、驚きを禁じえない。リヴィウ、キエフ、ハルキウといった街が、何倍もウクライナ代表を尊重しているというのに、ドネツィクとは?!」というのが、その書き込みだった。フェイスブック上では、それに共感を示すコメントも多く寄せられており、ウクライナの民主・民族派の一部がドネツィクに抱いている偏見を隠らずも露呈する形となった。^{*3}

さて、ウクライナ・サッカー協会のコニコフ会長は、今般のユーロマイダン革命でその座を追われたヤヌコーヴィチ大統領と昵懇だっただけでなく、サッカー界でミニ・ヤヌコーヴィチのごとく振る舞い、協会を私物化していたようである。政変後、コニコフに対する批判が噴出し、同氏

表1 ウクライナの主要サッカー・クラブとそのオーナー
(2013/14シーズンのプレミアリーグ参加クラブ)

2013/14年の順位	サッカー・クラブ名	オーナーおよびその財閥・企業
1	シャフタール・ドネツィク	R.アフメトフ*のシステムキャピタルマネジメント財閥
2	ドニプロ・ドニプロペトロウシク	I.コロモイシキーのプライベート財閥
3	メタリスト・ハルキウ	O.ヤロスラウシキー(DCHグループ)が保有していたが、2012年にS.クルチェンコ*(VETEKグループ)が強引に買収した
4	ディナモ・キエフ	フリホリーとイーホルのスルキス兄弟がオーナーであり、D.フィルタシ*のナドラ銀行がスポンサー
5	チヨルノモレーツイ・オデッサ	L.クリモフ*のプリモリエ財閥およびIMEX銀行
6	メタルルフ・ドネツィク	S.タルタのドンバス工業連合
7	ゾリャー・ルハンシク	Ye.ヘレル*のウクルスプラフ社
8	ヴォルスクラ・ボルタヴァ	K.ジェヴァホのファイナンス&クレジット財閥
9	FCセヴァストポリ	V.ノヴィンシキー*のスマート・ホールディング
10	イリチヴェツイ・マリウポリ	V.ボイコ*のイリチ記念冶金コンビナート
11	カルパティ・リヴィウ	P.ディミンシキーのZIK通信およびコンチニウム社
12	ホヴェルラ・ウジホロド	N.シュフリチ*の石油ガス採掘会社
13	ヴォルィニ・ルツィク	I.バリツァのウクルナフタ社
14	メタルルフ・ザポリージャ	O.ボフスラエフ*のモトルシチ社
15	タヴリヤ・シンフェロポリ	D.フィルタシ*のDFグループ
—	アルセナル・キエフ	O.オニシチェンコ*が保有していたが、スポンサーだったI.コロモイシキーが手を引いたことから、シーズン途中で経営破綻

(注) 2014年2月までの政権与党「地域党」に加わっていた人物に*印を付けた。基本的に原典に基づくが、S.クルチェンコとD.フィルタシは筆者の判断で加えた。

(出所) <http://ua.tribuna.com/tribuna/blogs/cifranedeli/3630.html> (September 9, 2014) をもとに筆者作成。

サッカー協会会長 プレミアリーグ会長

H. スルキス ～2012. 9	H. スルキス ～2000. 12	1999. 11 クチマ大統領再選
	R. サフィウリン 2000. 12 ～2008. 5	2004. 11～12 オレンジ革命。ユーシチェンコ大統領に 2006. 6 ドイツW杯でベスト8
A. コニコフ 2012. 9～	V. ダニロフ 2008. 5～	2008. 9 リーマンショック、ウクライナ経済難に 2009. 5 シャフタール・ドネツィクがUEFAカップ優勝 2010. 2 ヤヌコーヴィチ/地域党政権成立 2012. 6～7 ユーロ開催、ウクライナは一次リーグ敗退 2013. 11 ブラジルW杯予選プレーオフで仏に屈する 2013. 11～2014. 3 ユーロマイダシ革命 2014. 3～ ロシアがクリミア編入。ドンバス内戦

図1 ウクライナ・サッカーの幹部人事と主な出来事

(出所) 筆者作成。

の立場は危うくなった。^{*4} また、プレミアリーグにおいては、シャフトール中心の大会運営に他のクラブが不満を抱いており、シャフトールと他の全クラブ（その筆頭はデINAモ・キエフ）という抜き差しならない対立構図が生じているという。^{*5}

このように、ウクライナ・サッカー界のエスタブリッシュメントの動きを見る限り、ウクライナの地域対立、国家分裂の危機という一般的なイメージを裏づけているようにも思える。しかし、次章で見るように、同じサッカーでも草の根レベルの運動に着目すると、違った景色が見えてくるのである。

II サッカーが政変に果たした役割

1 伏線となったパヴリチェンコ事件

今回の政変に至ったウクライナ政治の底流と、そこにおいてサッカーが果たした役割を理解する上で、見逃せないのが、「パヴリチェンコ事件」である。

ことのあらまは、こうである。二〇一一年三月にキエフで、ある裁判官が殺害される事件が起きた。警察は容疑者としてパヴリチェンコ親子を逮捕。その息子の方が、デINAモ・キエフのサポーターであった。証拠は怪しいものばかりで、冤罪の疑いが強かったが、二〇一二年一月、裁判所は有罪判決を言い渡した（父ドミトロは終身刑、息子セルヒイは禁固一三年）。この一件を受け、警察の専横と恣意的な裁判に抗議し、デINAモのサポーターを中心に、全ウクライナのスタジアムで抗議行動が巻き起こった。

ちなみに、ユーロマイダン革命が高まりを迎えていた二〇一四年二月二四日に、ウクライナ最高会議（議会）の決定により、親子は解放された。ヤヌコーヴィチ政権の崩壊を受け、まずティモシェンコ元首相らの政治犯が解放されたのだが、「パヴリチェンコ親子にも自由を！」と叫ぶデモ隊が議会に詰めかけたことから、親子も「政治犯釈放」の一環として追加で自由の身となったものである。

管見によれば、この冤罪事件は、二つの意味で、サッカーが政変の推進力となっていく下地を作った。第一に、若者が反政府抗議行動に参加する土壌が作られたことである。ヤヌコーヴィチ政権が冤罪事件に直接関与していたかどうかは別として、サポーターたちは腐り切った警察や司

法をヤヌコーヴィチ体制と同根のものと見なし、政権への敵意を募らせていったに違いない。そして、その怒りを実際にスタジアムの内外で爆発させることを体験した。発煙筒や花火を使い慣れたサポーターにとって、それを火炎瓶に持ち替えることの敷居は低かったはずだ。第二に、ウクライナ全土のサッカー・サポーターたちが、地域やクラブの垣根を越えて、団結していくことを促した。YouTubeにアップされている動画を見ても、キエフを発火点とする運動が、ウクライナ全土のスタジアムに野火のように広がっていった様子が見て取れる。

2 バリケードのどちら側で戦うか

「チトゥーシキ (Tishki)」という新語は、ユーロマイダン革命を理解するのに欠かせないキーワードの一つといえる。チトゥーシキとは、反政府集会・デモを妨害するために、地域党政権や治安当局によって雇われた私服の用心棒のような連中のことを指している。二〇一三年五月に当局の息のかかったV・チトゥーシコという格闘家がジャーナリストを襲う事件が起き、同氏の名前をとって、当局に雇われたごろつき連中がチトゥーシキと呼ばれるようになった。

ウクライナ・サッカーでは、首都のディナモ・キエフを除けば、シャフタール・ドネツィク、メタリスト・ハルキウ、ドニプロ・ドニプロペトロウシクといった東部の重工業地帯を本拠地とするクラブが、強力な動員力を誇る。サポーターは若い男性ばかりで、お世辞にも柄の良い人々ではない。二〇一三年一月に始まった反政府デモが徐々に過激化していくと、政権当局はサッカーのサポーターを囲い込み、用心棒的に使うことを試みたようである。実際、上述のように、二〇〇二年当時はオーナーのアフメトフがシャフタールのサポーターを大挙してキエフに送り込み、同郷のヤヌコーヴィチの首相就任を後押ししたこともあったのだ。今回もヤヌコーヴィチは、市民による包囲網が狭まっていくなかで、シャフタール（ウクライナ語で炭坑夫の意味）の援軍が駆けつけてくれることを期待していたに違いない。

しかし、各クラブのサポーター組織は、予期せぬ動きを見せた。SNSなどを通じて、当局に買収されチトゥーシキになったりしないよう、メンバーたちに呼びかけたのである。むしろ、サポーターたちが組織的にキエフおよびその他の都市のマイダン（反政府デモの現場）に馳せ参じる動きが拡大していく。マイダンでは、ウクライナ国旗やE

U旗に交じって、サッカー・クラブの旗も振られていた。

こうしたなか、ウクライナ・サッカー協会のニココフ会長は、一月二八日に発表したサポーター向けの声明で、サッカーと政治を区別するよう呼びかけた。会長は、サッカーが政治的な決定を下すための圧力の手段になつてはならず、もしもサポーターが自らのクラブの旗を掲げて政治的な主張をしたら、それはもはや個々の市民ではなくサポーター・グループとして行っていることになつてしまうので、それは自重してほしいと呼びかけた。^{*7} 同じ頃、シャフタール・ドネツィクやメタリスト・ハルキウといったクラブも、サポーターに自制を求めるアピールを出している。^{*8} むろん、ドネツィクやハルキウといった東部のクラブのサポーターのうち、どれくらい割合の人々が反政府側に加勢したかといったことは、検証しなければならぬ。また、反政府デモ隊に占めるサッカー・サポーターの勢力がどの程度であったかということについても、慎重に見極める必要がある。ただ、筆者は個人的に、それが決して例外的・挿話的な現象ではなかったという印象を受けている。実際、ドネツィクからキエフの革命現場に駆けつけて亡くなったシャフタールのサポーターもおり、政変後のキエフの街角には同氏を悼むタオルマフラーが掲げられる光景が

あつた。^{*9} 少なくとも、「東部＝親ロシア」といった色眼鏡では、とうてい理解できない現象である。

3 地域分断を超えて

特筆すべきことに、政変劇がクライマックスに達していった二〇一四年二月二二日、ウクライナのほぼすべてのサッカー・クラブのサポーター組織による和解宣言というものが調印された。「ルハンシクからリヴィウまで」と題されたその宣言では（それぞれウクライナの東端と西端の都市）、民衆が治安当局と衝突しているという国難のなかで、サッカー・クラブのサポーター同士が対立し合うようなことがあつては国の分裂にも繋がりがかねないという危機感が示され、サポーター同士の場外乱闘やお互いのクラブのシンボルを侮辱するようなことを禁止することを約束し合つたのである。ある意味で、政治にも先駆けるような形で、ウクライナの地域分裂を乗り越えようとする動きが、サッカーから生じたわけである。ちなみに、この時点ではクリミアの二クラブ、すなわちタヴリヤ・シンフェロポリ、FCセヴァストポリのサポーター組織も宣言に加わっている。^{*10} もう一つ、きわめて興味深い出来事があつた。ウクライ

ナンのサッカー・プレミアリーグは西欧と同じ春秋制を採用しているが、寒冷地につき長い冬季中断がある。当初の予定では、二〇一四年三月二日に中断が明けリーグ戦が再開するはずだった。しかも、同節にはディナモ・キエフ対シャフタル・ドネツィク戦という、ナショナルダービーと位置づけられる注目の一戦が組まれていた。しかし、政情不安ゆえこの時点では開催が不可能であり、結局リーグ戦再開は二週間延期された。そうしたなか、本来であればディナモ対シャフタル戦があったはずの三月二日、キエフのオリンピック・スタジアムで、両クラブのサポーター同士の親善試合が行われた。「一体性マッチ」と名づけられたこの一戦は、仲良く引き分けに終わった。試合後には、出場したプレーヤーと観客全員がウクライナ国歌を斉唱し、このイベントを締め括った。^{*11}

ディナモ・キエフ対シャフタル・ドネツィクは、因縁の対決である。スペインでいえば、レアル・マドリードとFCバルセロナの対決のようなものだ。FCバルセロナがカタルーニャ地方の民族・独立運動を背景としているだけに、その戦いは熱を帯びる。一方、ウクライナにおいては、ディナモとシャフタルのライバル関係がそれに劣らず激しいにもかかわらず、現時点でシャフタル・サポー

ターの主流派は分離主義ではなく、あくまでもウクライナの一体性を希求しているのである。

むろん、シャフタル・サポーターは一枚岩ではない。二〇一四年二月二七日、UEFAヨーロッパリーグ（クラブの国際大会）の一戦がドネツィクで戦われた際、試合開始前にマイダンでの衝突で犠牲になった人々への黙祷が呼びかけられた。しかし、一部のサポーターが、「ベールクト！（Berku）」というチャントを送って黙祷を妨害し、ロシア国旗を掲げるといふ暴挙に出た（「ベールクト」というのは、キエフの反政府デモの鎮圧に当たった治安部隊のこと）。一方、そのチャントに対するブーイングも発生した。^{*12}いくつかの映像を照らし合わせて見ると、ベールクト支持派はどちらかというとき少数派と思われ、多くのサポーターはウクライナの国旗を振ってマイダンへの連帯を示しているようだが、いずれにしてもスタンドは分裂している。

また、現時点でサッカーが地域分断を克服する方向に機能しているといっても、それを過度に美化することは禁物であろう。そのことを思い知らせたのが、「オデッサの悲劇」である。二〇一四年五月二日、南部のオデッサで、ウクライナ・プレミアリーグの一戦、 Cholno Moroziv・オデッサ対メタリスト・ハルキウのゲームが開催された。

試合に先立って、両チームのサポーターが一緒になり、ウクライナの一体性を唱えるデモ行進を行ったのだが、当初平和的な示威行動だったものが、サポーターらのウクライナ一派と、反キエフ・分権主義者との、小競り合いに発展。衝突は試合後も続き、ついにはウクライナ一派派が反キエフ・分権主義者の立てこもるビルに火を放って、四八名もが亡くなるという大惨事となったのだ。サッカーのサポーターが火を放ったわけではなく、衝突のきっかけを作ってしまっただけとはいえ、現下のウクライナでは国の一体性を擁護したいという善意でさえも、反目や暴力に繋がりがねないという、苦い教訓を残した。

Ⅲ サッカーの国民統合機能

1 ソ連を知らない子どもたち

もともと、ウクライナのサッカー観戦の現場では、暴力沙汰が珍しくなかった。地元サッカー・クラブを応援することは、地域主義の最たるものであろう。しかし、まさに

そのサッカーのサポーターの間から、政治にも先駆けるような形で、ウクライナの地域分断を超越し国民的和解を達成しようとする動きが生じたことは、きわめて興味深い。

ユーロマイダン革命を経て、二〇一四年三月にリーグ戦が再開しても、サポーター間の衝突の類はいっさい発生せず、むしろそこには純粹なウクライナ愛が溢れていた。各党が党利党略に走り、好き勝手なことを言い合っている最高会議の殺伐とした光景とは、好対照である。

筆者自身、ウクライナ・サッカーの現場に溢れる愛国的な雰囲気を感じた機会があった。二〇一四年五月一日、キエフに滞在していた筆者は、二〇一三／一四シーズンのリーグ戦最終節であるディナモ・キエフ対ゾリャ・ルハンシクの一戦を現地観戦した。ルハンシクといえは、「親ロシア分権主義」で知られる地域にはかならないが、この会場に詰めかけた数十人のルハンシク・サポーターは、黄・青のウクライナ国旗をまとったり、あるいは「ルハンシクはウクライナである」と書いた横断幕を掲げたりしていた。試合中にキエフとルハンシクのサポーターがエールを交換し合うなど、ドンバスの戦場とは対照的な、友愛とウクライナ愛国心に溢れた光景がそこにはあった。試合開始前に国歌が斉唱されたのはもちろんのこと、試合中に

も観客が自然発生的に国歌を歌い始め（全員が起立する）、試合後にも国歌が流されたため、つごう三回も国歌を聴くことになった。

私見によれば、ウクライナの政治変動を理解するには、地域だけでなく、世代にも着目する必要がある。この間ウクライナが直面してきたEUかロシアかという地政学的な選択に関していえば、確かに西部および中部の住民はEU寄り、東部および南部の住民はロシア寄りという傾向があった。しかし、世代間で見ても、かなりはつきりしたコントラストが表れている。図2は、キエフ国際社会学研究所が二〇一三年一月に実施した全国世論調査¹³で、もしもウクライナの対外戦略を問う国民投票が行われたら、どのように投票するつもりかを回答者に問うたものだが、若い世代ほどヨーロッパ志向が強く、高齢層ではロシア圏への郷愁が根強いというパターンが顕著である。そして、ウクライナのサッカースタジアムに詰めかける観客の大多数が青少年である以上、東部のクラブを含め、サポーターの間でロシアではなくユーロマイダンへの支持が優勢になるのも、道理である。彼らは、物心ついたときにはもうソ連という国はなく、独立ウクライナで教育を受け育った世代である。彼らはもはや、ボスに動員される客体ではなく、S

NSで連絡を取り合って自発的に行動する市民たちである。筆者がウクライナ政変とサッカーのかかわりに関する情報収集を試みたなかで、T・マルイという現地のジャーナリストが次のように論じていたのが、きわめて新鮮だった。すなわち、ウクライナ各クラブのサポーターたちは、自分たちのチームを応援するために、国内のあらゆる地域を訪れている。その経験から、彼らは知っているのだ。実

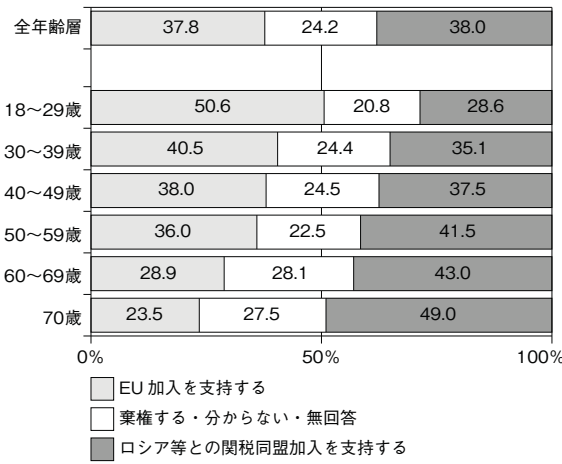


図2 国民投票が行われたらEUとロシア圏のどちらを選択するか？
(2013年11月のウクライナ世論調査結果、%)

(出所) <http://www.kiis.com.ua/?lang=ukr&cat=reports&id=204&page=2> (September 9, 2014).

は言語による障壁など存在しないことを。ウクライナが、バンデラ派の西部と、ロシアとの統合を夢見る東部に分裂しているなどという話は、事実と反することを。そういう神話は、政治家が利用しているだけなのだ、彼らは理解しているのだ。マルイはこのように論じている。^{*14}

いいかえれば、サポーターたちは国内各地を転戦することでウクライナを発見し、その行動範囲を自らが属す共同体として想像するようになったということだろう。さらに、強豪クラブの場合には、ウクライナ国旗を掲げてヨーロッパの国際大会にも参戦するので、それによってさらに国民意識が涵養されることになるはずだ。してみると、今回の政変の過程でサッカーのサポーターたちがウクライナの一体性を擁護する急先鋒になったことも、合点がいく。

2 地域別の支持クラブのデータから 見えてくるもの

キエフ国際社会学研究所が二〇一二年四月～五月にウクライナ全国で成人の回答者一六三六名を対象に、好きな自国のサッカー・クラブを尋ねた調査結果がある。ウクライナ全体だけでなく、西部・中部・南部・東部というマクロ

リージョン別のデータも出ており、大変興味深い。^{*15}

その概要をまとめた表2を見ると、やはりディナモ・キエフ、シャフタル・ドネツィクという二強の人氣が突出しており、なおかつ全国区の浸透度を示している。シャフタルなどは、他地域の国民から偏見を抱かれがちな東部のドンバス地方を代表するクラブでありながら、中部でも一八・八%、西部でも一二・六%の支持を受けている。

筆者の推察するところ、これにはやはりUEFAのコンペティション、すなわちUEFAチャンピオンズリーグ（CL）およびヨーロッパリーグ（EL）の果たしている役割が大きいと思われる。CLは欧州各国の強豪クラブが集う世界最高峰の舞台であり、ELもそれに次ぐレベルの大会だ。シャフタルやディナモはこうした大会の常連であり、特に近年はシャフタルの躍進が著しい（ELの前身のUEFAカップで優勝もしている）。ウクライナの各クラブはUEFAの大会に出場する際には、当然ウクライナ国旗を掲げて戦うことになる。テレビ中継もされるので、たとえ他地域のクラブであっても、ウクライナ国民がそれを自国の代表と捉えて応援する気持ちが芽生えても不思議でない。実際、キエフ国際社会学研究所のデータを時系列的に検証すると、ウクライナのあるクラブがUEFAの大

表2 ウクライナ国民が支持する国内サッカー・クラブ
(構成比、%)

	ウクライナ 全 体	マクロリージョン別の状況			
		西 部	中 部	南 部	東 部
ディナモ・キエフ	41.5	50.7	67.6	28.2	12.4
シャフタール・ドネツィク	26.8	12.6	18.8	21.8	58.1
メタリスト・ハルキウ	7.8	6.4	2.9	3.2	21.6
ドニプロ・ドニプロペトロウシク	5.7	0.6	2.2	18.3	0.6
カルパティ・リヴィウ	4.3	18.5	0.0	0.9	0.0
タヴリヤ・シンフェロポリ	2.7	0.3	0.4	9.5	0.0
チオルノモレツイ・オデッサ	2.6	0.0	0.0	9.7	0.0
その他のクラブ	7.3	9.0	6.9	6.8	6.7
いずれも支持しない	0.9	1.1	0.8	1.4	0.3
回答困難・無回答	0.4	0.8	0.4	0.2	0.3

(出所) <http://www.kiis.com.ua/?lang=ukr&cat=reports&id=73&page=3&t=12> (September 9, 2014).

会に出ると、全国的な支持率が上向く傾向が看取できる。現下のウクライナでは、サッカーの代表チームだけでなく、クラブ・チームも愛国心を刺激する要因になっているといつて良さそうだ。

IV 試練の二〇一四／一五シーズン

—— 結びにかえて

ウクライナは、サッカー・ワールドカップ・ブラジル大会の欧州大陸予選プレーオフで惜敗し、二〇一四年六〜七月のワールドカップ本大会に出場できなかった。ちなみに、大会開催時の世界ランキングを見ると、ウクライナは一六位で、これはブラジル大会に出ない国のなかでは最も高い順位だった。世界がサッカーの祭典に酔っていた頃、ウクライナはその輪に加わることなく、一人ドンバス情勢の泥沼化と深刻な経済難を耐え忍んでいた。

それでも、新しいシーズンはやってくる。ウクライナ・プレミアリーグの二〇一四／一五シーズンは、七月下旬に開幕した。問題を挙げればキリがないが、とりわけ如何ともしがたいのは、第一に、ロシアに編入されたクリミアのクラブがウクライナのリーグ戦に参加できなくなっ

まったことである。第二に、平和の戻っていないドンバス地方（ドネツィク州、ルハンシク州）での試合開催が不可能なことである。

二〇一三／一四シーズンのウクライナ・プレミアリーグには、タヴリヤ・シンフェロポリとFCセヴァストポリというクリミアの二チームが参戦していた。しかし、ロシアによるクリミア併合という事態を受け、両クラブとも法律적으로는いったん解散し、クラブ名を変更した上でロシアのクラブとして登記し直し、二〇一四／一五の新シーズンからはロシアの国内リーグに参戦した（ただし、UEFAからクレームがついたことなどから、二〇一五年一月にロシア国内リーグからも離脱）。クリミアを失ったことなどから、二〇一四／一五シーズンからウクライナ・プレミアリーグは参加クラブが二チーム減り、わずか一四チームでの再出発を余儀なくされた。

他方、内戦の舞台となつてしまったドンバスのドネツィク州とルハンシク州には、二〇一四／一五シーズンのプレミア参加クラブが五チームもある。当然、現状では地元でのホームゲーム開催が不可能ということで、同季については各クラブが代替の開催地を決めた（すでに政府軍によって解放されているマリウポリ市のイリチヴェツィだけは地元

開催の構えであつたが、結局はドニプロペトロウシクでの開催が中心となつた。それをまとめたのが図3であり、点を記した箇所が今季のプレミア所属クラブの所在都市を、東端にある濃い色のところが紛争の続くドンバス地方の二地域を、矢印が疎開先を示している。デイフェンディング・チャンピオンのシャフタル・ドネツィクは、首都キエフで日常的なトレーニングを行い、試合は西部のリヴィウで開催することになった。

東部のドネツィクと西部のリヴィウでは、直線距離で一キロメートルも離れており、言語・文化圏も異なる。それでも、シャフタルが近場ではなく、ウクライナ民族主義の総本山ともいえるリヴィウを選択したのは興味深い。少なくとも、シャフタル側はリヴィウを絶対的なアウェーの地とは見なしていないということではないか。実際、前出のトメンコ氏のように、ドネツィクに対するステレオタイプをむき出しにする識者がいる一方で、表2で見たとように、西部においてもシャフタルを応援する向きが一定程度存在するのである。

国家の一体性が危機にさらされ、国民統合の試練が続くなかで、今後ウクライナ政治とサッカーがどのような相互作用を及ぼし合っていくのか、引き続き注視していきたい。



図3 ドンバス各クラブのホームゲーム代替開催地

(出所) 筆者作成。

●注

*1 ユーロマイダン革命からポロシェンコ政権成立に至るウクライナ政治の激動に関しては、以下の拙稿参照。服部倫卓「ウクライナのユーロマイダン革命」『ロシアNIS調査月報』(二〇一四年四月号)、服部倫卓「ウクライナ大統領選とポロシェンコ」『ロシアNIS調査月報』(二〇一四年七月号)。

*2 本稿は、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターのウェブサイトに寄稿した拙稿、服部倫卓「サッカーの視点から見たウクライナの政治変動」(二〇一四年四月二日、<http://src-hslav.hokudai.ac.jp/center/essay/20140402-j.html>)をもとに、大幅な加筆を加えて完成させたものである。服部倫卓(インタビュ)「日本で語られない『スタジアムから見たウクライナ情勢』」『徹マガ』(一八八号、二〇一四年三月二八日)、服部倫卓(インタビュ)「その後の『スタジアムから見たウクライナ情勢』」『徹マガ』(二〇五号、二〇一四年八月七日)で語った内容も反映されている。なお、本稿ではウクライナの固有名詞をロシア語ではなくウクライナ語の読み方で日本語表記している。

*3 トメンコ氏のフェイスブックの二〇一二年六月一日付の書き込みを参照。<https://www.facebook.com/m.tomenko> (September 9, 2014).

*4 http://sport.lb.ua/football/2014/03/12/259090_donetskie_protiv_yanukovicha_hod.html (September 9, 2014)。なお、本稿脱稿後、ニコロフ会長は二〇一五年三月に退陣し、代わってA・パヴェルコが新会長に就任した。パ

ウエルロはドニプロペトロウシク出身で、ポロシエンコ大統領派の最高会議議員である。

- * 5 <http://dynamo.kiev.ua/blog/163825.html> (September 9, 2014).
- * 6 代表的なものとして、以下の動画を参照。 <https://www.youtube.com/watch?v=6yRIRXtLYug> (September 9, 2014).
- * 7 http://www.fiu.org.ua/ukr/ffu/about/ffu_news/12323/ (September 9, 2014).
- * 8 <http://shakhtar.com/ru/news/30260> (September 9, 2014). <http://runealist.ua/news/6286.html> (September 9, 2014).
- * 9 二〇一四年三月四日に北海道大学スラブ研究センターにおいて開催された北海道スラブ研究会で、藤森信吉氏が「ウクライナの『東西選択』を考える」と題する報告を披露された際に、同氏より「教示いただいた」。
- * 10 <http://ultras.org.ua/01372.html> (September 9, 2014).
- * 11 <http://rus.news.ru.ua/sport/03mar2014/dinamo.html> (September 9, 2014).
- * 12 以下の動画を参照。 <https://www.youtube.com/watch?v=CIZ0sdYrqZ0> (September 9, 2014).
- * 13 <http://www.kiis.com.ua/?lang=ukr&cat=reports&id=204&page=2> (September 9, 2014).
- * 14 http://zaxid.net/home/showSingleNews.do?pro_fanativ_bez_fanatizmu&objectId=1304278 (September 9, 2014).
- * 15 <http://www.kiis.com.ua/?lang=ukr&cat=reports&id=73>

&page=3&tr=12 (September 9, 2014). なお、ウクライナのマクロリージョン区分については、服部倫卓「ウクライナの東西選択と経済的利害」『ロシアNIS調査月報』(二〇一四年一月号)、二五頁で解説している。

●著者紹介

四五頁に掲載。